ARTIC
ASSOCIATION FOR RENGEIN TANJOJI INTERNATIONAL COOPERATION.
認定特定非営利活動法人
れんげ国際ボランティア会

みろくの風

Vol 77

今後の活動について夢と希望を語る母親たち
於：インド・アグラ市地区懇談会の様子
（左端はアルティック専門家スタッフ伊藤教授）

ARTIC
［認定特定非営利活動法人］
れんげ国際
ボランティア会

目次

- contents -

●新たな事業開始に向けて …… 2・3
●ウクライナ避難民受け入れ事業 …… 4・5
●事業終了のお知らせ …… 6・7
●能登半島地震緊急募金のお願い …… 8

令和6年能登半島地震
被災者支援募金のお願い

連日の報道でご承知の通り、令和6年1月1日、石川県北部において大地震が発生しました。被害は甚大であり、現地は混乱の中にあります（激甚災害）。

8年前の熊本地震、4年前の熊本豪雨の時には全国の人々が熊本を応援してくださいました。当れんげ国際ボランティア会も全国の心ある方々からの応援により、困窮する被災地域において各種緊急支援（支援物資配布、炊き出し、ボランティア派遣、被災家屋復旧、避難所支援など）を行ってまいりました。

さて、今回は当会独自のネットワークを活用し、当会と40年来お付き合いのある信頼できる現地の寺院や福祉団体を通じて、被災された人々への支援を実施致します。

特に石川県小松市にある那谷寺様（1300年の歴史を有する真言宗の名刹）は、当会と共に東日本大震災での復興支援活動を行い、その後の熊本地震や人吉豪雨災害の時にも物心両面に於いて多大なご支援を頂いた盟友ともいうべき間柄です。那谷寺様は数多くの福祉施設を運営されていて、災害時における適時、適所での支援のノウハウもお持ちです。今回、幸運にも

小松市では地震の被害が殆どなく、那谷寺様では現在すでに可能な限り、被災地域の福祉施設などへの緊急物資支援や被災した福祉施設利用者の移動活動を実施されています。

当会は皆様からご寄付頂きました浄財を元に、那谷寺様をはじめ現地団体を通して、必要な方々への支援を実施致します。

活動のご報告は、当会ホームページやニュースレターにて行います。皆様、どうか支援の募金を宜しくお願い申し上げます。

ご送金方法

郵便振替：【加入者名】特定非営利活動法人
れんげ国際ボランティア会
【口座番号】01710－2－107858

第77号　2024年（令和6年）1月
季　刊／みろくの風（れんげ国際ボランティア会会報）
発行人／川原英照
住　所／〒865-0065
熊本県玉名市築地2288
電　話／0968(73)4851

◇各種お問い合わせ◇
（認定NPO法人）
れんげ国際ボランティア会
http://rennge.asia
e-mail artic@renge.asia　@renge.artic

新たな事業に向けて その I

今年4月より、インドのヒマーチャル・プラデッシュ州アグラ市にある貧困地区の学校増改築と、それに並行した学校周辺を中心とする総合的な環境問題に包括的に取り組むこととなりました。

この事業は熊本県立大学や熊本県立環境センターにご協力を頂きながら、複数年の取り組みとなります。ゴミの分別とリサイクル化、トイレや上下水道の整備事業です。

不衛生な学校給食の改善も大きな課題です

当会れんげ国際ボランティア会(以後ARTIC)では2020年度からインドのチベット難民居住区において上下水道・トイレ建設事業を行ってまいりました。これは国会議員によるチベットを支援する議員連盟、通称「チベット議連」の依頼を受けて始まりました。コロナ禍に見舞われたり、困難なインド政府との調整などもあり、大変難航致しました。しかし、熊本大学名誉教授の伊藤先生(工学部建築土木学科)に助けられ、なんとか2022年9月に無事全事業を終了させることができました。伊藤先生のご尽力には心より感謝を申し上げます。光栄なことにチベット議連からも大きな賛辞と謝意を頂きました。この第二弾として、チベット議連から、チベット人居住区の病院4か所の上下水道・トイレ整備事業の依頼を頂いており、実現に向けて、助成金の申請などに関して鋭意努力をしているところです。

◆

さて近年インドは経済の発展が著しく、月に探査機を着陸させるほどの経済力・技術力がある国であり、「いったいなぜそんな国に支援をしなければならないのか?」と疑問を持たれる方も少なくないと思います。しかし実は、インドには昔からの宗教的な因習が現代社会でも根強く残っており、このことによって就ける職業が決まっています。そして近年の経済発展の恩恵を享受しているのはごく一部の上位階級の人々であり、多くの方々は経済発展で急騰する物価のあおりを受け、逆に以前よりも生活が苦しくなっています。実質的には貧富の格差が急速に拡大しているということです。そのせいで児童労働も根絶には至っておらず、結果として、貧しい人は更に貧しくなる負の連鎖に陥っています。

今回我々は支援しようと考えているアグラ市の貧困地区に何度も調査に訪れました。そこでは子ども達が暗い家の中で革靴の縫い付けをしている光景を多く目にしました。その多くが女の子です。何故かというと、この地域では男尊女卑の風習も根強く残っており、男の子は学校に行かせるが、女の子は学校に行かせず、内職や家事の手伝いをさせられることが当たり前となっています。

ごく一部の例外を除いて、この地区の子どもたちは、中学校までで教育を終えます。その理由は、この地区には高校がなく、もし高校に行こうと思えば、近隣の街の高校に入学せざるを得ません。しかしそこでも露骨な差別を受けたり、ひどい場合は暴力やレイプを受け、通学も命がけになるのだそうです。理不尽な事にはこれらの事件に巻き込まれても犯人が逮捕されることは稀で、大抵の場合はうやむやになってしまうそうです。法治国家であるはずのインドですが、そのような「摘要外」の扱いを受ける人々が大勢おり、そのリスクは最大級です。しかもそのほとんどの場合が泣き寝入りをしているそうです。

実はインド国内には「彼らを救済する必要はない」と心から信じている人達も多く、彼らの救済をしようとするインド人が現れると、その人が人々から攻撃を受け、最悪の場合、殺されたという事例もあるほどです。そういう意味で、この地域の方々への支援を行うということは、ある意味インド社会のタブーへの挑戦でもあります。我々のインド事業のパートナーである現地NGOはそのようなリスクを抱えながらこのような人々への支援を行ってきた数少ない団体のひとつです。彼らによると、外国NGOであるARTICと協働での支援活動となれば、むやみに手が出(攻撃)しにくく、自分たちのリスクも減るとのことで、歓迎をされています。とは言え、リスクは完全に消えるわけではないので、安全には最大限に配慮をして事業を進めていく所存です。

◆

インドですでに以前から教育支援をされているNGOスタッフに今後の当会の活動について相談した時に、その方が「実は私の一番の悩みは…」と、苦しそうな表情で以下のことを語ってくださいました。

「私は、学校に行かず、ゴミ漁りを日課としている子どもたちに青空教室で勉強を教えてきました。すると中にはとても頭の良い子がいるわけです。そしてその子自身も自分が他の子よりも勉強ができるということに気づいてくるのです。当然周りの他の子も、それに気づき、その子に一目置くようになります。以前はゴミ漁りしかしていなかったので知らなかったわけですけど、勉強をやりだすと、頭のいい子ですから、自分が他の子とはちょっと違うぞ、と気づいてしまうわけです。ところがですね…その子がどれだけ優秀であっても、結局のところ社会自体がその子を受け入れる用意ができていないので、結局のところその子の人生は変わらないわけです。自分の秘めている可能性に気が付かなければ、それですみますが、気づいてしまったら、将来それは絶望感に変わるかも知れない…宇宙飛行士になれる可能性を持った子が、一生ゴミ拾いをしながら生きていくわけです。私は良かれと思ってこの活動を始めましたが、もしかしたらそれは単に私の自己満足の追及であって、子どもたちがそれで本当に幸せになれるのかどうかと考え出したら、ときどきブレーキを踏みたくなることもあるんです。ですから、私もARTICさんに協力します。ARTICさんのプロジェクトは私自身の悩みも解決してくれるかも知れないからです。」

この方の言葉には強く胸を打たれました。心の底から子どもたちの将来を真剣に心配されているからこそ、このような悩みに突き当たるのだと思います。

◆

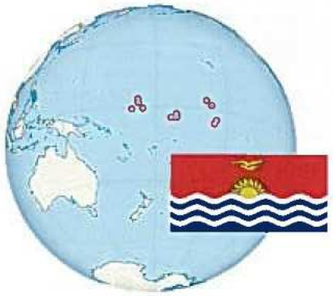
実は我々は1990年代にタイのスラム街の支援をやっておりました。当時のタイのスラム街はこのアグラ市の貧困地区と同じように酷い状態でした。当時、そのスラム街に建てた市民図書館に毎日通ってきては片っ端から本を読み漁る1人の女の子がいました。この子は今、なんとタイ政府の駐ロシア外交官になっています。そういうことが起きることを私たちは身を持って知っているので、このインド社会のタブーにも敢えて挑戦してみようという勇気が沸いてくるのです。

新たな事業に向けて その II

新たな事業として、キリバス国への国際支援の案件が進んでいます。きっかけはキリバスにある、その名も「タマナ島」という島名が発端となりました。この名前を聞いてピンとくる方もいらっしゃると思いますが、当会は玉名(たまな)市という場所にあります。その玉名市はここ数年、名前が由来となって起こった民間の国際交流を後押ししています。

また、この交流の仲介をしている一般社団法人日本キリバス協会から当会に対して国際協力に関する依頼がありました。その依頼を受けて、さらに深く多方面からキリバス国に関して調査をしてみると、島嶼国(とうしょこく)※の持つ脆弱性がゆえに直面する様々な課題が明らかになりました。

※島嶼国とは:
島々から構成され、大陸から距離が離れているため、開発上困難を有する発展途上国



キリバスの地図と国旗

キリバスという国は余り日本では知られていませんが、実は、先の大戦の激戦地のひとつで、駐留日本軍がほぼ全員が玉砕された場所です。そのため当時の情報が極端に少なく、遺骨の収集が遅れています。現在でも手探りで進めていますが、キリバスの方々はこれに多大なご協力をして頂いています。もしかしたら戦没者の方々の魂が私たちをお呼びになっているのかなとも感じております。

また、日本の遠洋カツオ一本釣り漁船では多くのキリバス人の方が漁師として働かれており、中には船長と機関士以外はすべてキリバス人という船も少なからずあるそうです。また、キリバスは紛れもない親日国です。東京オリンピックの際には、桜と富士山をデザインしたユニフォームで入場行進してくれた国があったことが記憶に残っている方もいらっしゃるかも知れませんが、それがキリバス代表団でした。

話がそれましたが、企画中の本プロジェクトでは、ARTICがプロジェクト総合管理、研修面では九州看護福祉大学がホスト校となり公衆衛生、口腔保健等々の研修カリキュラムの作成と実行、玉名市が研修生の生活面のサポートと文化交流行事の企画、という役割分担を予定しています。

◆

キリバスは乳児の死亡率が1000人あたり約41人と非常に高く、平均寿命も約68歳です。成人男性の76.6%、成人女性の80.9%が過体重で、糖尿病も多く、特に45~69歳の女性では44%以上が糖尿病を抱えています。その一方で、5歳未満の幼児の約25%が低体重で、児童の約40%は貧血です。これらは食事等の生活習慣に起因するところが大きいと思われます。また熱帯性伝染病や他の感染症の問題も多く、公衆衛生、予防医学の充実が重要な課題となっています。日本での研修で学んでいただいたことは、帰国後、現地で数多くの研修会を開いていただき、国全体に周知していただくことになります。ARTICは日本キリバス協会とのパートナーシップでその現地での活動までをフォローアップする予定です。

◆

さて、インドの貧困地区の事業や、キリバスの保健省の事業は私達ARTICだけできるものではありません。しかし今回、インドやキリバスの問題を目前にし、なんとかしたいという気持ちから、環境問題がご専門の大学教授や、医学・看護系の大学教授を訪ねて、協力をお願いして回りました。すると、12人の先生がたがARTICの新たな挑戦のために、無償アドバイザーのお仕事を快く引き受けてくださいました。そればかりか先生がたの中には、ARTICがそのような場を提供してくれことを逆に感謝されました。よく考えてみれば、熊本でも当会ほど長く海外協力活動をやっている団体は少なく、先生がたにとっては、その有り余るご叡智を持って他国の恵まれない人々のために役に立てる機会が少なかったのです。さらに熊本県は水俣病という悲しい歴史を持っているが故に、環境問題に関するノウハウは世界トップクラスの叡智を築いています。ARTICはこれらの叡智を兼ね備えられた先生がたが世界の舞台で活躍されるためのプラットフォームとしての役割を果たせるものと考えております。

海面上昇のため世界で最も早く水中に没すると言われるキリバス

「日本のことがもっと知りたい」
ウクライナ避難民支援事業

熊本県の玉名郡玉東町には現在5世帯15人のウクライナからの避難民が生活をしています。避難民の受け入れを開始して1年半になりますが、文化や生活習慣、行政システムなどが自国と大きく事なる避難民の皆さんは慣れない中で頑張って暮らしています。

「ここに書いてある年金って何のこと？」日本で就労を開始したウクライナ避難民の女性が、初めての給与明細を持って私達のところに質問に来ました。彼女が家族と共にウクライナから玉東町に避難して1年が過ぎた10月のことでした。

さらに彼らからは生活面を中心に様々な質問がありました。「各季節でどんな災害があるのか」「どれくらいの大雨だと電車が止まるのか」「雇用保険は何のためにあるのか」「国保と社保はどっちに入るか選べるのか」「学校のマラソンはなんのためにあるのか」「冬の寒い日でも、短パンやスカートの制服を着るのはなぜか」etc…

私達は、ウクライナ避難民の入国後1週間以内にオリエンテーションを行い、町での生活に必要な情報（病院、役場、買い物、交通機関、ゴミ出しなど）や日本で生活するための基本情報（110番や119番、災害時の行動など）、税金や光熱費など、支払わなければならないお金についての説明を行っていました。

私達からの生活サポートを通して就学や就労が始まり、日本の生活様式に慣れようと日々生活をしていくなかで、多くの避難民は日本特有のルールや習慣に戸惑っている様子が見られ、この1年間で新たな質問が多く出てきました。

そこで、あらためて彼らにアンケートを実施し"日本で生活するために知りたいこと"の聞き取りを行い、その結果をもとに2日間に分けて下記の内容のフォローアップオリエンテーションを行いました。

【内　容】
年金・税金（確定申告を含む）・健康保険・医療・防犯・交通ルール・教育・車購入時の注意点・心理ケア

さて、フォローアップオリエンテーションの実施のために、町役場の職員や最寄りの年金事務所、警察署、ウクライナ避難民の心理ケアを専門に行う外部団体の職員、ウクライナ語の通訳者など、多くの方と調整を行い、説明内容や資料を作り上げました。

さらに、ウクライナ避難民だけではなく、地域に中長期的に居住する外国人の皆さんにも同じように生活に関する疑問を抱きながら困っているのではないかと考え、このオリエンテーションに参加してもらうことにしました。資料はウクライナ語の他、やさしい日本語（※次のページに説明有り）、そして英語の3種類を準備しました。

当日は、各担当者にやさしい日本語での説明をお願いし、ウクライナ避難民に対してはウクライナ語の同時通訳を行いました。その結果、質疑応答の時間にはウクライナ避難民を含む外国人からも多くの質問があり、質問する彼らの姿を見て、どのようにフォローアップオリエンテーションが役立ったか、また社会に潜在しているニーズに気づき、今後もウクライナ避難民支援を通して、地域の多文化共生支援の必要性を実感しました。

◆

最後になりましたが、このウクライナ避難民受け入れプロジェクトは、素晴らしい支援体制を敷いて献身的なサポートを行われている玉東町役場や関係者の方々、地域の皆様、それを資金面でバックアップしてくださる日本財団の皆様、そしていつも当会ARTIC（れんげ国際ボランティア会）を信頼して心温かいサポートを下さる会員の皆様のおかげで実施できています。当会は今後もウクライナ避難民一人ひとりの悩みに寄り添えるよう、日々彼らと共に事業を行っていきます。

引き続き温かいご支援の程、どうぞよろしくお願い致します。

■ フォローアップオリエンの様子

▲フォローアップオリエンテーションでは、ウクライナ避難民の他にも地域在住の外国人の方が参加されました。多くの方の協力のお陰で成功裏に開催することができました。

■ 日本語カフェの様子

▲定期的に日本語カフェを開催しています。日本語カフェでは、日本語でのビンゴゲームや抹茶のおふるまい等の日本文化体験を行っています。また、熊本市国際交流事業団の協力を得て、町内の日本人の方に日本語サポーター（日本語ボランティア）を募集し、異文化理解ややさしい日本語に関する研修を行っています。

※やさしい日本語とは …

やさしい日本語とは、難しい言葉を言い換えるなど、相手に配慮した
わかりやすい日本語のことです。
日本語の持つ美しさや豊かさを軽視するものではなく、外国人、高齢者や障害のある人など、多くの人に日本語を使ってわかりやすく伝えようとするもの
（出入国在留管理庁・文化庁）

～ミャンマー事業終了のお知らせ～

少し残念なお知らせですが、当会の主要な事業でありましたミャンマーでの学校建設と地域開発事業が今年度をもって終了することとなりました。

その最大の理由は内政の悪化です。ご存じのようにミャンマーは数年前から軍事政権に戻り、民主化の象徴であったアウンサン・スーチー氏が軟禁状態にあるなど、私達NGOが活動するには大変困難な状況にあります。多くの危険も伴う中、ここまで無事に事業を完遂してくれた平野所長には感謝と共に、これまでのミャンマー国への貢献に対して最大の敬意を表したいと思います。また、これまで事業を支えて頂いた支援者の皆様には心より感謝申し上げます。

さて、私たちはミャンマーでの活動を「ミャンマー学校建設事業」と簡単にまとめて言っております。しかし、当会を長年に渡ってご支援くださっている方々はよくご存じだと思いますが、実はその本質的な目的はもっともっと深いところにあります。

よく建立物や銅像等に「魂を入れる」という表現を用いることがありますが、実はこの「学校建設事業」というのも全く同じで、私たちは建設した学校に「魂を入れる」ということを必ず行います。学校の「魂」とは、まさにその学校で活躍される先生方に他なりません。私たちは建設した学校で教鞭をとる先生方に対してARTIC研修センターで常に研修を提供してまいりました。この10年間で113校の学校を建設いたしましたが、それに並行して1000人以上の若い先生方への研修を実施してまいりました。

この研修は教科の研修ではなく、多少おこがましい言い方ですが「教師という職業に対する自覚の覚醒」をテーマに行ってまいりました。具体的には、教師という職業が国の発展に与える貢献の大きさ、教師が生徒の人生に与える影響の大きさ、そして教師自身が教師としての人生を全うすることによって自分自身に得られるメリット、等々を自分たちで議論し、自分たち言葉でまとめていただき、それを通して「覚醒」していただくことを目指しました。

▶ミャンマー教育省大臣より：
内容：「教育省は、過去10年間での113校の校舎寄贈と21回の教師トレーニングに対して、ARTICに感謝と敬意を表します。」

ミャンマー感謝状

◆

ミャンマーでは初等教育、中等教育、学部によっては大学教育があります。しかし、ただひたすら教科書を丸暗記して試験に備えるというもので、自分の意見を生成したり、他人と議論したりという、深い「思考」を必要とすることはほとんど行いません。現存のミャンマーの先生方の大多数がこの教育を受けて育ってこられた方々です。よって、自分の意見を人前で述べたり、他の先生方と議論を交わすという経験、体験を持っておらず、研修の初日はどの先生も大変戸惑い、ストレスさえ感じるのです。

しかし1週間の合宿研修を通して、いろいろな手法で「覚醒」を促した結果、100%とは言えませんが、大多数の先生方が今までとは少なからず違う使命感を持って各々の教育現場に帰って行かれます。

◆

今回、ARTICとしては、ミャンマーの学校建設事業が終了し、ミャンマーの事務所も撤収しましたが、この先生方の研修については、研修センターの建物も含めて、現地のNPOに引継ぎました。このNPOにはARTICの現地人スタッフも数名が再就職し、これまで培ったノウハウとスピリッツを継承していきます。そして、ARTICはこのNPOに対してしばらくの間、資金面で支援を行ってまいります。その意味ではミャンマーからの完全撤退ではなく、後方支援に切り替えたことになります。今後は校舎を建設したり、学校に遊具を設置したりというハード面での支援は行いませんが、先生方の研修を後方から支援することによってミャンマーの教育発展のためにソフト面で引き続き寄与してまいりますので、変わらぬご支援の程、よろしくお願いいたします。

～ ウクライナ避難民支援事業引継ぎのお知らせ ～

一昨年(2022年)の5月より開始致しましたウクライナ避難民の受入事業ですが、こちらは当会の役割は終わったと判断し、事業を他団体に譲り、当会は退くことと致しました。その理由は当会はもともと難民支援の団体であり、緊急時の役割を担います。ウクライナの国内状況は別として、避難してこられたウクライナ人の皆様の現状は緊急事態を脱したと判断致しました。

現在、玉東町には、5家族15名の避難民の方々が生活されています。ARTICとしては、初動的なウクライナから日本への避難ルートの確保から、日本入国のための査証取得、助成金の確保、生活必需品、オンライン学習のためのパソコンや、インターネット環境、携帯電話等々の企業支援の確保、玉東町でのスムーズな生活開始までを、くまなくサポート致しました。そして、就職を希望されたすべての大人が就労でき、就学を希望されたすべての子ども達が就学できました。その意味で避難民の方々を安全に日本にお招きし、生活を安定させるという緊急性の高い初動的なフェーズにおいての役割は十分に果たしたと考えております。

助成金で支援してくださった日本財団様からも、玉東町とARTICの官民連携体制に対しては、高い評価を頂き、モデルケースとして、将来のための「避難民支援マニュアル」の作成を当会に依頼されるという大変名誉なお仕事も頂きました。しかしこれは、町として初めて挑んだ「避難民受入」という非常に難易度の高いテーマに、町長の強いリーダーシップの元、献身的に取り組まれた玉東町役場の皆様の努力の賜物であり、最大限の敬意を表したいと思います。

日本に避難されてきたウクライナ人は全国に2500人以上いらっしゃいます。しかし残念ながら、受入先でトラブルになり日本国内で「再避難」されたり、日本を去られたりしたケースも実は少なからずあります。玉東町ではそのような問題は一切起きていません。逆に先に来られていた方々から奨められて玉東町への避難を決断されたケースがほとんどです。これはまさに玉東町役場、そしてことあるごとにサポートいただいたJICA熊本、玉名市、玉名国際交流協会、熊本県国際協会の方々のご尽力の賜物でしょう。

◆

さて私達「ウクライナ避難民サポートチーム」はこれまで全力で避難民の皆さんを支えてまいりました。客観的な評価として、普段の生活レベルにおいてはおおむね不足はないと判断されています。ただし異国に住む彼らにとって、文化や習慣、言葉、さらには地域との関りといった面では悩みは尽きません。しかし、これらはウクライナ避難民の皆さん特有の問題・課題ではありません。昨今技能実習生など多くの外国人の方々が来日しておられますが、その多くの皆さんが持つ共通の課題なのです。

そして、それらの課題については、日本に住む外国人の生活サポートという領域で我々よりもはるかに高い専門性やご経験をお持ちの優秀な方が玉東町の地域起こし協力隊員としておられ、ウクライナ避難民支援の専任として携わっていらっしゃいます。よって知恵・経験・機動力すべての面で当会より実力をお持ちです。ここから先は我々はしゃしゃり出るべきでもないと考えました。つまり、我々が必要とされた緊急的な初動フェーズを無事切り抜け、自治体による自立フェーズに入ったとも考えております。これまで本事業を支えてくださったARTIC支援者の皆様に心より感謝申し上げます。